

汲古一心

『鑑賞の印』(一)

中村素堂

中国歴代の名蹟がこんなに多量に、首尾完全な形で見ることができたのは大変な眼福であり、名は知っていてもその筆蹟がこのような形で故宮に存在していたのかと感嘆させられるものも少なくない。しみじみ閲覧しているうちに、書というものの特異性について、いろいろと教えられるものがある。これらの大量な伝存が必ずしも最初から美術とか芸術とかいう面が特に強調されたり、またそれを主目的として制作されたものばかりでなく、そういうものもあるうけれど、書翰のような意志の伝達のための筆蹟、あるいは単に個人の記録として書留めた感想など、祭祀の詞、經典の類、挽詩とか墓志の類、告身などという任官に関わるもの、筆墨を使つてすぐれた字が書かかれてあれば、本来の用を離れて一切を鑑賞の珍玩とされ、史実の方から人物としての敬慕からなども加えて、文・詩ともこの墨一色のものが大変な扱いをもつて、歴代帝王から庶民まで断簡零墨でもこれほどに珍重する習慣があるのは、漢字文化圏の国々以外には絶対にはないのではあるまいか。

全く中国人のこの風習の深さには驚かされる。全然文字が読めない人々でも、文字の書かれている紙帛を粗末にしない。それが名士の書というのではなく、日常茶飯、生活の裡に書かれた反古でさえ丁寧に焼却する装置があるのを見たことがある。実は今日は文字書写のできないものはほとんどなくなつたといわれているし、物の価値観に随分新しい考えが普及してきて、中国人はまだこんな風習を捨てないであろうか。私は機会があつたらこんなことも一度たしかめてみたいと思つている。

今こんなことをいい出したのは、実は中国の書画の有名な作品を見ると、実におびただしい所蔵・閲覧・保存等に関する記載と印の押捺の量に一驚するのである。

世界中でこの国に他人の作った書画などに対して、その余白にこれを所蔵したり、観た人々が多く言葉を書き添えているものがあるうか。帖・冊・巻の終わりに書き添えているのは、その制作された

本体に対しては何も手を入れていのではないからまだ良い。だがそれが印となるとそうではない。

日本などの習慣では、印は作者が署名とともに首尾に一、二を押捺して十分で、後人が後人の意志を示すものとして、さらに印をその作品上加えることはまずないのが一般である。

それが作者と同じ時代の人から始まって遠い後代の人々が、次々と大小さまざまの印を余白のあるかぎり加えてゆくのである。それも実に見物れるような美しい色つやを持つ、良質な朱の印泥で鄭重に捺してある。

たとえば有名な蘇東坡の作品を見ても、かんじんの筆者は「蘇軾」と年月日の終わりに書いて、「眉陽蘇軾」また「東坡居士」などという朱文の印をひとつ捺してある。時にはないものもあるほどである。

元・明にわたる趙子昂の作品でも子昂とか記して「趙氏子昂」と回文の印か「鵬波」と二字の連印を捺しているのに、その作品の前後の空間には隙もないほど、どうかすると文字の行間にまで後人の印が捺されている。

そしてそれはどんな印が入っているのか。

△宣 和 △政 和

などという小型の長方印で朱文のものがあるのは、北宋の元号のものである。宋・元ごろのものはあまり大きいもの、字の多いものはないが、これが明を経て清朝に入ると、印が非常な進展をとげて、印文の上にも彫る技術の上にも空前の精巧というか、興趣というか漢・秦以後すぐ清朝に接するのだという説もあるほどで、印そのものが立派にひとつの芸術的ジャンルとなつてくると、上は皇帝から、

△嘉慶御覽之宝 △乾隆御覽之宝

△乾隆鑑賞 △三希堂精鑑璽

△御書房鑑藏宝 △○○皇太后御覽之宝

まだ現代ともいえそうなく、

△宣統御覽之宝

などまでであり、前記三希堂のように蔵書の名のものもある。そしてこれらは正方形のものもあるが、多くは楕円または円形である。

(つづく)